

『職員室 5:15 p.m.』

弘前劇場公演 作・演出／長谷川孝治



舞台監督／野村真仁 照明／中村昭一郎 音響／原島正治(舞台音響・囃組) 舞台美術／三浦孝治 装置／鈴木徳人 制作／佐藤誠(有限会社弘前劇場)

青海衣央里(客演) 長谷川等(浪岡演劇研究会) 江口恵美(統園会)

福士賢治 鈴木徳人 畑澤聖悟

後藤伸也 永井浩仁 佐藤誠

山田竜大 佐藤潤平 佐藤てるみ

藤本一喜 杉原文子 赤羽泰子

濱野有希 石橋彩子 中村智枝子

携帯電話

長谷川孝治

夏の暑い昼下がりのだった。「はい、もしもし」「……」「さっき起きて、ちょっとバイクでも磨いて、それから書くよ。はいはい、どーも」などと言いながら電話を切り、ガレージのシャッターを開けた。新車で買って今年で10年目、5,000キロしか走っていない我がバイクのシートをはぎ取る。自分の金でしかもキャッシュで買えるようになったら買う。それが私のバイクに対する考え方で、35を過ぎてから、カミさんと一緒に中型免許を取り、チョッパータイプのバイクも購入した。

ガレージのシャッターを開けるのは久しぶりで、シートを取るのは多分4年ぶりくらいだろう。車検はとっくの昔に切れ、タンクの中のガソリンは腐ってるだろう。緊張の一瞬だった。やはり、マフラーとスポークにはうっすらと錆が浮かんでいる。小学校3年になった息子が、トウモロコシをほおぼりながらガレージに姿を現す。「これ、おとうさんの?」「うん、もう10年ここにいる」「ふーん、触っていい」「いいよ、でもトウモロコシのカスは付けるな」「うん」手を洗いに行った息子は、無論このバイクよりも新しい。

10年前、このバイクを買った時はまだだいぶ暇だった。日曜ごとに3時間かけてピカピカに磨き上げたものだった。磨きながらいろんなことを考えた、勿論一番考えたのは芝居のことで、その次が……なんだったか忘れた。「これバイク?」あったりめえだろうがと言いかけてやめた。息子はこんな機械の塊が私に属することの不思議を言葉にしたまでのことだ。「揺さぶる」か「叩く」私の機械に対する接し方はその2種類しかないのだ。

バイクは蜂のお腹みたいなタンクを黒く光らせていた。バッテリーは完全に上がり、ウンともスンとも言わない、バックミラーの腐食が最もひどい。キャンプ用の小さな折り畳み椅子に腰掛けて、錆落としの作業に入っていく。息子は私の対面地でべ

たにあぐらをかきながら手伝う。「これ、乗れるの?」「うん」「どうやって」「跨って」「ふーん」半時間ほど作業を続けると汗だくになってくる。コンクリートに汗がピチャピチャ音を立てて落ちる。「史郎、もっと丁寧に」「うん」普段コンピュータ・ゲームにしか興味のない息子が汗だくになってバイクを磨いている、それはなかなかいいものだった。

「はい、ええ、大丈夫です」携帯電話に出ると、知らない声が響く「ええと、ちょっと待って下さい」言いながら勉強部屋へ上がって、スケジュール表を確認する。無論その間は階段を登りながら、どうでもいい世間話が続くことになる。「ええ、空いてますから参加できます」「はい、よろしくどうぞ」……切った携帯電話はそのままポケットにしまわれることになる。

息子は、短バンのわきちょっから大事な若いトウガラシを時折見せながら、汗まみれになってバイクを磨いた。意地でも時間を作り、こうなりや車検を取ってタンデムするしかない。そう心に思い決めて、私もせっせとバイクを磨いていた。「あらま、珍しいね」「こんにちは」近所のおばさんが声を掛けては通り過ぎる。「お父さんがいるのはあれか、珍しいか?」何気なく尋ねる。息子は何も言わない。ただ、黙ってスポークを磨いている。

また携帯電話が鳴る。私は着信画面も見ずに電源を切った。このバイクが来たときには携帯電話などなかった。あったかもしれないが、少なくとも普及はしていなかった。したがって、便利だけれどとても不機極まる道具を私は所有していなかった。そして、電話をどこに置いたのかを私は忘れた。「これ、何」と、息子がなんか珍しそうに尋ねたのは覚えている。何かのゲームらしいと錯覚した息子が携帯電話を手にとったのも覚えている。しかし、その電話が息子の手によって、乗用車のタイヤの真下に置かれたことを私は知らなかった。

「さて、バイクを外に出すぞ」錆落としはほぼ終わった。久しぶりにバイクを日光の下に晒したい、ただ出すためには乗用車を移動しなければ

ならなかった。そして、バイクは4年ぶりに日光浴し、私の携帯電話は哀れにも車に轢かれてバラバラになった。

それを境に、私は携帯電話を使用するのを止めた。もともと、電源を切っているのが常態だった私にとって、携帯電話のない生活はさほど不便なものではなかった。しかし、精神の有り様は劇的に変わった。それまでの私には携帯電話というのが中心にあり、その回りで常に携帯電話を気にしながら生きていた。留守電を聞く、人に会っているときには電源を切る、誰かに電話して繋がらないのに腹を立て、しどろもどろになりながら誰かの留守電に録音し、そしてまた録音がないかもしれないのに1416にかけた。

つまり、私は、携帯電話を持って誰かと話してはいたが、「目を見て直接に誰かと話していなかった」のだ。それは薄まってしまった水割りに似ていた。手軽で、早く、どこでも、誰とでも、というのは戦後の民主主義にどこか似ている。つまり、そこには熟考がなく、それ故に責任を取る者がどこにもいないのだ。「薄くて、見えないけれど広い人間関係」が世の中に蔓延していく。

高校教育の現場。高校生はそれぞれに着メロを変えて(実際には有限の選択肢しかないのだが)個性を出そうと努めている。着メロというのは、相手に否応なしに興味や趣向を伝えてしまう。「あ、この人クラシックにコンプレックスがあるのか」「なんだ、まだアニメの世界か」「それじゃあ、マザコンがモロだろ」……。すかっぺのような着メロを聞くたびに私は思う。「今、なにしてる?」「今、どこいる?」「元気してなあ」想像力の欠片もない会話が空中を飛び交う。薄められてスカスカの会話は、高校生の現実認識を今日も確実に変えていく。

史郎は久々にバイクに跨り、私は彼とコーナーを抜けるときの快感について話した。

弘前公演◆11月7日[水]

於/弘前市文化センター

036-8356 弘前市下白銀町19-4 TEL.0172.33.6571

東京国際舞台芸術フェスティバル2001

東京公演◆11月16日[金]~18日[日]

於/世田谷パブリックシアター(英語字幕付き)

154-0004 世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー3F TEL.03.5432.1526

AI・HALL 自主企画 vol.122

伊丹公演◆11月12日[土]・13日[日]

於/AI・HALL

664-0846 伊丹市伊丹2-4-1 TEL.0727.82.2000

弘前公演	11.7
14:00~	—
19:00~	★
受付45分前・開場30分前	

東京公演	11.16	17	18
14:00~	—	★	★
19:00~	★	★	—
受付60分前・開場30分前			

伊丹公演	2002.1.12	13
14:00~	—	★
19:00~	★	—
受付60分前・開場30分前		

◆料金(全席自由)・東京、伊丹公演は日時指定あり
前売・予約/¥2,800 学生前売・予約/¥1,500(劇団、AI・HALLのみ取扱)
当日/¥3,000(当日の学生割引はありません。ご注意ください。)

※東京公演前売・予約に限り SePT倶楽部/¥2,500 世田谷区民/¥2,700(くりっくチケットセンターのみ取扱)

◆チケット取扱(弘前・東京公演 10月10日発売、伊丹公演 11月11日発売開始)

弘前公演/弘前劇場 0172.62.0717 スタジオ・デネガ 0172.32.1794 市内各プレイガイド(紀伊國屋書店、JOYPOPS、他)

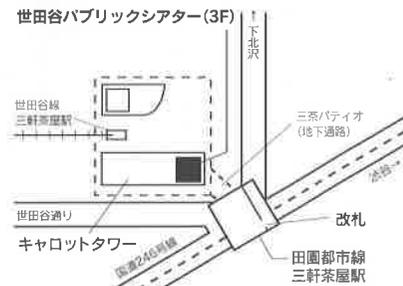
※弘前公演に限り、乗書をご持参の方は前売料金にてご入場頂けます。

東京公演/弘前劇場 0172.62.0717 チケットぴあ 03.5237.9988 くりっくチケットセンター03.5432.1515

伊丹公演/AI・HALL 0727.82.2000 チケットぴあ 06.6363.9999 06.6363.9966(Pコード=406-115)

【問い合わせ】弘前劇場 Tel./Fax. 0172.62.0717(時間外 090.3124.0339)

E-Mail office@hirogeki.co.jp URL http://www.hirogeki.co.jp/



※17・18日、14:00開演の回に限り、有料託児サービスあり(定員制・要予約)
お申込み・お問合せ/世田谷パブリックシアター 03.5432.1530(10:00~12:00)